

<全体分析>

試験時間 2科目で150分

解答形式

(第1問) 論述式 (第2問) 論述式・記述式・選択式 (第3問) 記述式・選択式

分量・難易(前年比較)分量 (減少・やや減少・**変化なし**・やや増加・増加)難易 (易化・やや易化・**変化なし**・やや難化・難化)

2024年度から、3年連続で第1問が2題構成となった。この形式が定着する可能性が高いだろう。ただし、形式の違いはあるものの、本質的には東大が求めている能力は変わらないと考えられる。2026年度は問(1)が10行で問(2)も10行であった。なお、2024年度は問(1)が12行で問(2)が5行、2025年度は問(1)が12行で問(2)が8行であった。

第2問は、問(1)で会話文が出題された。しかし、出題内容や傾向については、第1問と同様に本質的な違いはない。問題構成は4行論述が1題、3行論述が1題、2行論述が4題であった。なお、昨年度は4行論述が1題、3行論述が2題、2行論述が2題。第2問の総行数の推移は2021年度が13行、2022年度が14行、2023年度が11行で、2024年度と2025年度は14行、2026年度は15行である。

第3問は従来通り設問10問であった。7年連続で1行論述は出題されなかった。ただし、解答にあたって昨年度と同様に資料などの読み取りが求められており、解答に時間を要するだろう。

出題の特徴や昨年との変更点

第1問が2題で構成された点は、2024年から続く新しい傾向である。第2問では会話文による出題がなされたこと、第3問では世界史探究の授業を念頭に出題がなされたことも新しい傾向であった。ただし、分量・難易の箇所でもコメントしたように、本質的には第1問・第2問・第3問ともに大きな相違はない。第1問は「ムガル帝国の宗教政策・文化とポルトガルのアジア進出」、第2問は「地球環境と天然資源」、第3問は「世界史における女性と男性」がテーマとなった。

その他トピックス

第1問については、すでに新課程で求められるような能力を例年の東大入試において問うている。その点で、突出した変化があったわけではない。第2問と第3問については、出題の特徴や昨年度との変更点のところでも述べたように、会話、世界史探究の授業を題材とした出題がなされており、これらが新課程を踏まえた出題と言える。

今年度のズバリ!的中として、まず第1問の問(1)が、2025年度直前講習「東大世界史テスト」第1講第1問の内容と的中した。ムガル帝国について論じる問題で、指定語句の「ペルシア語」が使い方も含めて一致し、ティムール朝との歴史的関連、宗教政策など、解答で求められる視点を扱っていた。第1問の問(2)は、2025年度冬期講習「東大世界史」第3講第1問問(2)で扱ったオリジナル問題と解答の骨子がほぼ一致していた。解答でゴア・マラッカ・マカオ・平戸などを明示することを求めており、本試験の指定語句「マカオ」「マラッカ王国」と対応している。そのほか、大学受験科完成シリーズ「世界史 演習編」の第21・22講の基本例題の15で、露仏同盟にともなうフランス資本のロシアへの流入、シベリア鉄道の敷設などを述べる問題を扱っている。ただし、日頃の着実な学習が合格への近道なことは言うまでもない。

<大問分析>

番号	出題形式	出題分野・テーマ	コメント(設問内容・答案作成上のポイントなど)	難易度
第1問	論述	ムガル帝国の宗教政策・文化とポルトガルのアジア進出 (近世)	<p>問(1)ムガル帝国の宗教政策と文化について問われているが、問題文の「モンゴル帝国解体後の広域交流の展開を踏まえて」という条件を踏まえる必要がある。指定語句の「ティムール」があるので、モンゴル帝国解体後にティムールが中央アジアからイランにかけて支配したこと、ティムールの子孫がムガル帝国を建てたことについて指摘する。指定語句の「ペルシア語」は、単にペルシア語がムガル帝国の公用語というだけではなく、例えばウルドゥー語の成立に言及するなど、文化の説明として用いてほしい。</p> <p>問(2)ポルトガルのアジア進出が問われている。問題文の指示として「世界の一体化」の進展を踏まえることが求められているので、ポルトガルが、ヨーロッパから直接にアジアへと至る航路を切り拓いたこと、一方で既存のアジアの交易網に参入する立場だったことも念頭に置き、指定語句の「ザビエル」は、単にキリスト教について論じるだけでなく、ポルトガルのアジア進出と関連づけよう。問題文の「17世紀中頃」になると、ポルトガルにかわってオランダがアジアの貿易において台頭していくが、オランダのその後の活躍を準備したのがポルトガルとも言える。2010年の第1問では「オランダおよびオランダ系の人びとの世界史における役割」を問うているが、その土台になるポルトガルの役割を意識できるとよいだろう。</p>	やや難

第2問	論述 記述 選択	地球環境と天然資源 (中世～近代)	問(1)(a)会話文のなかの「左の人は斧を持っていますね。キリスト教とは関係がなさそうですが…」「しかしこうした活動も、彼らの修道生活にとっては大きな意味を持ったのです」といった内容について具体化する意識を持つとよいだろう。(b)問題文をしっかりと読み取ることが求められている。「当時のヨーロッパの気候傾向」は温暖化であり、問われているのは「その傾向(温暖化)に変化が生じた時期」だから、寒冷化の影響を述べるのが題意。読み取りができたかどうかで点差が開く問題になっただろう。問(2)(c)問われている王朝はマムルーク朝である。「対外的な動き」なので、十字軍やモンゴルを撃退したことや、メッカ・メディナについて指摘しよう。問(3)(b)1890年代のロシアのシベリア開発が題意だが、述べるべき影響は1890年代に限定されていないと考え、日英同盟や日露戦争まで論じるべきだろう。	標準
第3問	記述 選択	世界史における女性と男性(古代～現代)	資料などを読み取らなくてはいけないため例年よりも時間がかかったはず。解答は難しくないが、全体の時間配分を上手にしないと大変だっただろう。問(1)は、パネルの内容から判断して1880年代以後の内容であることから、タンジマートやミドハト憲法制定の時期よりも後。「1910年代に女性雑誌が多数刊行された」背景となる政治的事件なので、1908年の青年トルコ革命が正解となる。	標準

※難易度は5段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

<学習対策>

第1問は、題意を踏まえていかに歴史的な文章を構成できるかが問われるので、論述力を日々研鑽することが大事となる。第2問は基本的な問題が中心だが、要点を的確に指摘できるように内容の理解を深めておかないと高得点は望めない。第3問は平易だが、第1問・第2問との時間配分にも留意しなければならない。基本知識をしっかりと習得したうえで、第1問の大論述だけでなく、第2問の短い論述に対しても十分な準備・対策が必要である。年度ごとに出題形式・字数など若干の違いはみられるが、本質的な学力を求められている点では変わらない。時間軸・空間軸に沿って大局的に歴史をとらえることを心がけよう。